

## 渋沢栄一翁揮毫による扁額（へんがく）について

～第12代 上田 強 校長 創立80周年記念誌「千畳原史話」への寄稿文より～

講堂の正面向かって左に掲げられている「博施於民而能濟衆」（博く民に施してよく衆をすくう）という額は、渋沢栄一の書いたものである。

渋沢栄一は青淵（せいえん）と号し、明治時代の実業家の第一人者で、日本近代の産業はほとんど彼によって築かれたといっても過言ではない。

例えば、わが国の銀行で最も古いのは第一銀行であるが、それを創設したのは彼であり、その後長く頭取もしていた。

商工会議所、手形交換所、銀行集会所、興信所などを創始したのも彼である。

その他わが国の取引所、海運、鉄道、保険、紡績、製糸、製紙、瓦斯（ガス）、電気、セメント、煉瓦（レンガ）、肥料、ビール等々の企業をわが国ではじめて起こすのに、彼の関係しないものはない。しかもいつも主役であった。また60年前、すでに外国人誘致に目をつけ、帝国ホテル、帝国劇場を建てたのも彼である。

というわけで彼の伝記は、正に明治産業史であり、日本近代産業の起源を探ろうと思えば、どうしても彼の伝記によらなくてはならない。

いな唯に産業ばかりではない。日本の貨幣制度の確立についても、彼を除いては論ずることができないし、殊に私達の銘記しなければならないことは、彼がわが国の商業教育の大恩人であるということである。政治家官吏はもとよりのこと、錚々（そうそう）たる実業家でさえ、商人には学校教育の必要なしと考えていた時代に、独り彼は、商業教育なくしてわが国の商業の向上発達はあり得ないとして、大いにその必要性を論じ、商業教育の創始ならびにその発達のために、少なからず力を尽くしたものである。

私のころ、校長室に彼の大写真額を掲げていたのは、そうした商業教育の恩人だからである。写真は下商の創立70年—それはまた同時にわが国に商業学校がはじめて出来てから70年でもあるが—に、私が特に乞うて、第一銀行から寄贈を受けたものである。（その寄贈を受けるに当たっては、同行勤務の大正14年卒の同窓福本正樹氏の特別の斡旋を受けた）

彼はまた今から90年前（明治7年）まだ社会事業などは世人の夢想もしないころ、早くも東京養育院を経営し、以来一生を通じそうした方面にも力を致した。また尋常ありふれた実業家でなかったことが判る。

講堂にかかっている青淵のこの額は、正直のところ、下商のために揮毫（きごう）せられたものではなく、実は下関物品問屋組合のために書かれたものなのである。その組合は今はないが、かつては非常に有力で、全国にその名のきこえたもので、いわば下関の商人なり商業を代表するものであった。

由来下関には、青淵渋沢栄一の記号にかかる大額が三つあった。その一つは下商で、前号（千畳原史話）に述べた「達人大観」というものであった。惜しいことに大正11年の春の火災の時焼失してしまった。

その二は下関商工会議所にある「進徳工夫在日新」というものである。恐らく今もなお同所にかかっている事かと思う。

そしてその三が下関物品問屋組合事務所（西南部町にあった）にあったこの額である。それを同組合解散の時、私が貰って来たのである。その経緯については又別の機会に譲ることにしよう。

「博く民に施してよく衆をすくう」という字句は、論語の雍也篇にあるものである。その意味は注釈づきの論語ならばいずれにも出ているから、諸君が直接就いて見ることを望むが、青淵自身はその著書にこの語句を引用して、“商業は単に利益を計るのみであってはならない、必ずや世のためになり、一般の人々に利益をもたらすものでなければならない”と論じている。

恐らく下関の代表商人のためにこの句を揮毫する時も、そうした気持ちをもちながら書いたものであろう。してみると、それはまた当然に商業高校の教育上の指針でもなければならない。

【現在は下商校長室に掲げられている渋沢翁揮毫による扁額】



<注>

- 1 本文書は、上田強校長が1964年（昭和39年）8月に本校創立80周年記念として「千畳原史話」に寄稿されたものを、第35代 久保田力哉校長が2021年（令和3年）4月に一部を修正したものである。

※第12代 <sup>うえた つよし</sup>上田 強 校長 在任期間…昭和21年4月～昭和31年9月

- 2 文頭には、渋沢翁の扁額は「講堂の正面向かって左に掲げられている」とあるが、その後、校舎移転等の紆余曲折を経て、現在は本校校長室に掲出されている。
- 3 渋沢翁扁額中の文字「濟」には、「すくう」、「たすく」の2通りの読み方がある。
- 4 文中にある下関商工会議所所蔵の扁額「進徳工夫在日新」は、残念ながら現在は所在不明とのことである。
- 5 本校校誌「千畳原」の前身である「校友会誌」第49号（大正3年10月発行）には、渋沢翁は大正3年6月、中国を視察した帰途、当時の齋藤軍八郎校長（第8代）の依頼により本校に立ち寄られ、講堂で生徒に講演をされたという記録が残っている。